
『距離』

夢月こもも

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

『距離』

【コード】

N4548C

【作者名】

夢月こもも

【あらすじ】

ふと目に付いたカップル。娘と会話しながら、自分の気持ちを振り返る。主婦視点の重めな語りです。

ひとつ置いた隣のテーブルで、ひと組のカップルが向かい合っていた。

互いに身を乗り出し、まるでそこが二人だけのプライベート空間であるかのごとく、10センチの距離で見つめ合う。

「ねえ、あんなの、あり？」

私は向かいの娘に、目で指す。

興味深げに視線を走らせた娘は、案の定爆笑した。声を殺して。

『なしでしょ！ ありえないってー！』

「だよ。何が楽しくって、あんな距離で……」

再び見ると、男女はそれぞれの飲み物を口にしながら、深く座っていた。

「あれ……？」

だが、男が「そうそう、この前さ」と話しかけた途端、また引力が発生する。

『距離』

互いの鼻だか顎だかがグインと引っ張られて、またその密室が出来るのだ。

「なんかさ……見てるだけで、くたびれない？」

『つく、つく　笑わせないでよ、お母さん！』

呼吸困難を起こしかけている娘に、昔話をひとつ。

「いたのよ、前の仕事仲間の女同士の中に一人だけね。アフターフアイブのビル陰に、彼氏をいつも迎えに来させてさ」

「あーん、クルシイ。　それって、アッシーなわけ？」

指先で涙を拭いつつ、話についてきてくれる。

「あんた古い言葉知ってるね。さすがあたしの娘。褒めてつかわす」

「ラブラブだったんでしょ？」

「もつちろんよ。だって、鼻先2センチで話していたのよ？　口臭もろかぶりの距離なんて、H以外の時で信じられない。それをさ、女6人のすぐ脇でやつちやっていたんだから、ある意味すごいいね」

そう言いながら、私はまた左をチェックする。

今度は手も繋ぎ合っていた。

テーブルの両サイドからの指が、恋人絡みでだ。

私は一瞬天井を見て呆れ、肩で溜め息をついた。

『距離』

「それで？　その二人、当然結婚した？」

「うっん、“当然”別れた」

「ええ？ そんな付き合いなのに、別れちゃったの？ なんで？
わかんないなー！」

「まだ青い女子高生には、到底わからないでしょうよ。燃えすぎて
疲れちゃったんじゃないの？ 多分ね。もしかしたら、彼氏のほう
はまだ学生だったから、社会人になった彼女と、感覚がずれちゃっ
たのかも知れないし」

サンドイッチの残りを一口で詰め込んだ私。モグモグと動かしま
ながら、ストローの袋を三つに折り畳んだ。

その両端を中央で外側に折り返し、占いのスタート。

「なに、それ」

『“あの二人”の今後を占ってしんぜましょう』

アイスコーヒーストローの先1センチほど含ませる。

占いネタの中央に静かに運び、一滴垂らした。水分の応援を借り
た両端が、腹筋運動のようにツイットと立ち上がる。

「さあ、どうでしょうかねえ……」

娘と私の注視の中、45度、60度と近づいていく“二人”。

逢いたかったわ、あなた！

もう離れないよ、おまえ！

とでも言っているかのごとくだ。

だが、ラブ率100%の結果に数ミリを残し、はたと動きが止まった。

濡れた自身の重みで、また両脇に開いていき、こと切れた。

「あーあ、残念。うまくいかないってことだよね」

遠慮を忘れた声に、注目された気配を頬に感じた。

私も娘に負けじと言う。

「そうみたい。勢いだけはよかつたんだけどねー」

さすがにちよつと気が引けて、付け足した。「もう20年も前の話よ。何が理由だったんだか」

一言で表すなら“相性”となるのだろうか。

ラブ率などにかかわらず、結婚してうまくいくには、互いが空気のようになれるかどうかもあるかも大きな鍵だろう。

毎日が灼熱では喉が渇く。

淡々《たんたん》ぼんやりではつまらなそうだが、毎日はきつと無事に過ぎる。

かく申す私はどうか。

自分のストロー袋を差し出した娘。

「ねえねえ、じゃ今度は、お父さんとお母さんを……」

「やるだけ無駄よ」

軽くあしらう。「さ・て・と。40分だったわね。そろそろ着くわよ」

「あ、そうだね。お出迎え、お出迎えっ」と

「今日もよろしく」

笑顔の娘に手を引かれ、私たちは新幹線改札口へと向かった。

「あー、来た、来た。お父さーん！」

娘が先に手を振る。私の肩口をちょんちょんと突きつつ。

いつもの東京土産を提げ、大きなバッグを背負った夫が、私たちに気付いてちよつと目を逸らした。

口元に浮かんだ一瞬の照れ笑いは、どちらに向けたものか。

1メートルの目前に立ち止まった夫。

「おう、美和子。今日は塾ないのか？」

「休み。夏期講習は明後日からだし。今日はサンダル買ってもらっ

たの。ね、お母さん」

「お帰りなさい。疲れたでしょう。混んでいた？」

タタタツと喋り、顔色を見る私。

返事はない。いつものことだ。

ろくに「ただいま」も言ってくれない夫の視線を避けて、一歩後ろを歩き出す。

大きなカバンは娘が引き受け、土産は私が。

だが今日は、思い切って夫の背中に話し掛けた。
頑張つて腹筋を意識し、なるべく明るく。

「ねえ、今晚のオカズはね！ お父さんの好きなナスの揚げ浸しと、肉じゃがと……」

振り向いてもくれない。
足が止まりかける。

すかさずフォローにまわる娘。

「ねえねえ、お父さん。今日はお父さんの好物ばかりだって。ちやんと、聞いてあげなよ」

「聞いているさ。ビールは冷えているか？」

父娘のやりとりは続く

人前で2センチの距離など近づいたことはないが、これも夫婦。娘を通じての会話でも、成立すればOK。

「羨ましかったのよね、さっき……」

つぶやきで形にした思い。「聞いて欲しいよね。よくわかるよ」

前に行く二人には聞こえない程度に、そっと自分をなだめてやった。

「でも、無事に生活が出来ているんだから、感謝しなくちゃ」

幸せが当たり前すぎて、多分そのありがたみを見失っている私。更年期のせいにしたり、幸せのせいにしたりしながら、今週末を過ごす。

山ほどの洗濯物だけが、妻であることを実感させてくれる。

(創作：短編)

(後書き)

読んでいただけて嬉しいです。
ありがとうございました。

『距離』

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4548c/>

『距離』

2008年8月13日21時35分発行